

アメリカ・リベラリズムの発展*

山 本 晴 義

(1) 「リベラリズム」と「フォーディズム」

F (a) 第二次世界大戦後、文字どおりアメリカを中心とする世界秩序＝「パクス・アメリカーナ」が発展し、国内ではほかに例をみない高い水準の経済成長が続きました。50年代から60年代にかけて、市民のあいだにはアメリカの将来に対する自信が広くみられました。社会思想の世界ではどうだったのですか。

H はい。第二次大戦で、ヨーロッパの文化は、ナチズムとスターリニズムによって破壊されます。戦後世界の思想をリードしたのはやはりアメリカの「リベラリズム Liberalism」です。

F アメリカの「リベラリズム」というのは。

H アメリカで「リベラリズム」と言うとき、その指標になっているのは、「ニューディール」あるいは「フォーディズム」です。例えば、ほぼ安定した労資の力関係の確立、私企業の力の抑制、政府による社会保障制度の充実などを目指す立場です。だから「リベラリズム」は西欧の社会民主主義のアメリカ版だと言われます¹⁾。

F とすると、それまでの自由放任主義はアメリカでは「保守主義 Conservatism」として扱われる。

H そうです。19世紀の後半、南北戦争後出現した広大な国内市場によるアメリカ

* この小論は執筆中の入門書『対話・現代アメリカの社会思想』のうち、その第一部「アメリカ・リベラリズムの発展」の第一章、第二章と第三章にあたるものです。

なお補足しておけば第四部「現在のアメリカ思想」は大阪経済大学『教養部紀要』（第19号、2001年12月）、『大阪経大論集』（第53巻第1号、2002年5月）に発表した。

本書の性格から対話体としたが、ここでFというのは友達のこと、Hというのは私のことです。

1) この問題については佐々木毅『現代アメリカの保守主義』（1984年、岩波書店）、同『アメリカの保守とリベラル』（1993年、講談社学術文庫）参照。

資本主義の急速な発展、いわゆる「^{ギルデッド・エイジ}金ぴか時代」「金めつき時代」の中で、ハーバート・スペンサー（1820－1903）の社会進化論を説いたウィリアム・サムナー（1840－1910）などがそうです。彼は社会の進歩は自然の進歩と同様、生存競争であり、不平等の原理が貫徹しているため、当然「社会淘汰」、「適者生存」が生まれてくると説いた²⁾。あとでふれるルイス・コーザー（1913－）はサムナーの社会ダーウィン主義を「大実業家を文明の華として賞賛」³⁾するに等しいと言っています。

したがって1980年代以降、自立自助の名のもとに規制緩和・福祉の削減・民営化・市場万能論を説き、「強いアメリカ」を主張する、いわゆるレーガノミックスは「新保守主義 neo-conservatism」とか「新自由主義 neo-liberalism」と呼ばれます。それは60年代に爆発した黒人運動、スチューデント・パワー、カウンターカルチャーやフェミニズムの高揚に対する反動であり、生命、性や家族の領域における伝統的な価値の奪回や伝統的宗教復興の保守主義と結びついています。

F (b) では、アメリカの「リベラリズム」の指標として言われた「ニューディール」あるいは「フォーディズム」というのは、

H はい。世界経済に甚大な被害を及ぼした1929年の大恐慌の原因の一つは、第一次大戦以降、徐々に変り始めた「大量生産技術」が確立し、労働生産性も高まったにもかかわらず、労使関係が進まず、賃金上昇が不十分なため、大量生産品に対する需要が不足したことにあります。危機を象徴する銀行の倒産は、29年にはまだ659行だったのが、33年には4000行に、そしてフランクリン・ローズヴェルトが大統領に就任した3月4日には33の州が銀行を閉めていた。

「ニューディール（新規まき直し政策）」を唱えたローズヴェルトは、国内需要の形成のための賃金上昇と労働組合の役割を重視し、プロ・レーバー的な政策（労働者階級に味方する政策）、例えば33年の「全国産業復興法（NIRA）」の第七条（a）項

2) William Sumner, *Folkways*, 1906（サムナー『フォークウェイズ』青柳清孝・山本英治・園田恭一訳、青木書店）。

なお Richard Hofstadter, *Social Darwinism in American Thought*, 1955.（ホフスタッター『アメリカの社会進化思想』後藤昭次訳、研究社叢書）。『社会進化論』（1975年、『アメリカ古典文庫』第18巻、後藤昭次訳、研究社）参照。

3) T. Bottomore and R. Nisbet, *A History of Sociological Analysis* の第八章, Lewis Coser, “American Trends”, 1978.（コーザー『アメリカ社会学の形成』磯部卓三訳、アカデミア出版会）。

や、とくに35年の「全国労働関係法（ワグナー法）」を遂行しました。労働者の組織権・団体交渉権や最低賃金と最高労働時間を保障し、労使関係の転換を行っていったのです。

この労使関係の転換は、その後労働者の闘い、労働組合の結成の中で経済システムの大転換をもたらしました。「フォーディズム」と言うのは労働生産性の上昇に応じた賃金の上昇が認められるようになり、大量生産と大量消費が促進される経済システムで、第二次大戦後から1960年代末まで確立しました。したがって「ニューディール」は、このフォーディズムの本格段階へ移行するまでの「形成期」だと言えます⁴⁾。

(c) この様に見てくると現代のアメリカ社会思想を見る場合、この歴史的過程をおさえる必要がある。アメリカ・リベラリズム、アメリカ版社会民主主義と言っても、フォーディズムの形成期の思想とフォーディズムが成立した時期の思想とは明らかに違いがあります。例えばニューディールに思想的影響を与えたジョン・デューイ（1859－1952）とフォーディズムが実現した時期に活躍したタルコット・パーソンズ（1902－79）やダニエル・ベル（1919－）らとは違います。デューイの方がずっとラディカルです。

デューイは1935年のすぐれた本『自由主義と社会行動』の中で「急速に集団化しつつある社会では、事態の現実を考慮し、社会的な利害にたつて政治を構築すべく、共同的思考の必要がある。そのときはじめて、社会の利益のための組織的行動が現実のものとなる。いまやわれわれは、なんらかの社会主義を必要とする」といい、新しい「知的・道徳的パターン」を強調して、「公共的社会主義 Public Socialism」を提唱しています⁵⁾。弟子でマルクス主義とプラグマティズムを結びつけようとしたシドニー・フック（1902－89）は、この本を「20世紀の『共産党宣言』」⁶⁾だと言っています。

F デューイは1928年の大統領選挙で、第三党の社会党の候補ノーマン・トーマスを支持していますね。29年には「リベラリズム」の人びとを結集して「独立政治活動

4) フォーディズムの発展段階については栗木安延『アメリカ自動車産業の労使関係－フォーディズムの歴史的考察』（1997年、社会評論社）参照。

5) John Dewey, *Liberalism and Social Action*, 1935. (デューイ『自由主義と社会行動』中村雄二郎訳、世界大思想全集『デューイ』河出書房新社所収、287ページ)。

6) Sidney Hook, *American Philosophy-Today and Tomorrow* 1935. なおこの頃のフックについては S. Hook, *From Hegel To Marx*, 1936. (フック『ヘーゲルからマルクスへ』小野八十吉訳、御茶の水書房) 参照。

連盟」を組織し、初代会長になっています。37年には1936-7年の肅清「モスクワ裁判」で、スターリンに「人民の最悪の敵」だと断罪され、メキシコに亡命したすぐれた革命家レオン・トロツキーとその息子レオン・セドクにたいする「真相調査委員会」の委員長を引受け、メキシコに出かけて聴聞会をやり、『無罪』⁷⁾ (1938年) という報告書を出版した「ほとんど英雄的な行為」⁸⁾を行っています。

H そして、この時期は、恐慌下の失業と資本の暴力的支配の下で、ワグナー法などの進歩的労働立法によって、労働運動が爆発的に高揚した時です。38年に熟練・不熟練、人種、男女を問わず加盟を認める民主的な全労働者階級の組織化として CIO (産業別労働組合会議) が結成され、「シットダウン (工場占拠)」戦術で GM でも U S スティールでも労使協約を勝ちとっていった時です。

しかし戦後は異なる。本格的なフォーディズムの確立の中で、労使関係の転換という「社会革新」、自動車・テレビや家庭電器など新しい耐久消費財の大量生産・大量消費による高度産業社会・高度大衆消費社会が実現し、「新中間層」の増大、「福祉国家」、官僚制や社会の平準化、大衆社会化が拡大します。文字どおり「パクス・アメリカーナ」が発展する。

だから同じ「リベラリズム」と言っても、この時期活躍したパーソンズやベルらは、デューイなどと違って、批判的な、歴史的な精神が随分希薄です。パーソンズやベルについてお話する前に、しかしもう一つ私達がおさえておかねばならないことがあります。

(d) それはアメリカのリベラリズムに対して「コミンテルン Communist International」が与えた影響です。アメリカの労働運動や知識人に対して与えた誤った影響です。大体、アントニオ・グラムシ (1891-1937) のようなすぐれたマルクス主義者は「アメリカニズムとフォーディズム」について早くから強い関心を持っていました⁹⁾が、コミンテルンはレオン・トロツキー (1879-1940)¹⁰⁾とニコライ・ブハー

7) Not (Guilty: Report of the Commission of Inquiry into the Charges made against Leon Trotsky in the Moscow Trials, 1938.

8) Isaac Deutscher, *The Prophet Outcast; Trotsky: 1929-1940*, 1963. (ドイツチャー『追放された予言者・トロツキー』山西英一訳, 新潮社, 412ページ)。

9) グラムシ「アメリカニズムとフォード主義」(『グラムシ選集』第3巻, 合同出版所収) 参照。

10) トロツキー『わが生涯』1930年 (栗田勇・渋谷龍彦・浜田泰三・林茂共訳, 現代思潮

リン (1888-1938)¹¹⁾をのぞけばアメリカの資本主義の重要性について無関心でした。

1928年、コミンテルンの第六回大会はスターリンの「全般的危機」論を「世界綱領」として確立しました。それは世界恐慌下の資本主義諸国を一様に「革命的情勢」下にあると考え、革命を阻害する最大の要因を社会民主主義＝「社会ファシズム」による労働運動の指導に見だし（「社会ファシズム論」）、共産主義政党の指導する武装蜂起による「プロレタリア独裁の樹立」が唯一の出口であるとするものでした¹²⁾。コミンテルンの支部、実際にはソヴェト共産党の支配下にあり、29年からアール・ブラウダー (1891-1973) が党首であったアメリカ合衆国共産党は、ローズヴェルト政権を「社会ファシスト」の双生児の「片割れ」と批判し、ニューディール政策をアメリカ版のファシズムであると決めつけた。

しかし1935年、コミンテルン第七回大会で「反ファシズム統一戦線・人民戦線」の方針が決定すると、今度はローズヴェルト、リベラリストをファシズムに反対する民主主義陣営の一部と規定し、ニューディール政策を支持し、ブラウダーは「共産主義は20世紀のアメリカニズムである」と言明しました。ジョン・ルイス (1880-1969) が率いる CIO は急速に成長し、共産主義者の影響力も強まりました。「アメリカ作家連盟」や「反戦・反ファシズム・アメリカ連盟」のような共産主義者が支配するグループに多くのリベラル派が参加しました。

そして1939年8月、例の独ソ不可侵条約が締結されたのです。共産党はルーズベルトを主戦論者だと非難した。これはアメリカの労働運動指導者や進歩的知識人にとって信じられないことでした。彼らの間に「共産主義」や「マルクス主義」に対する不信感が拡大しました。人民戦線の諸団体はつぎつぎと瓦解していきました。そのうえ1941年、ドイツがソ連に侵攻したため、今度は平和政策を放棄し、ローズヴェルトの戦争政策を支持した。43年、コミンテルンが解散され、戦後、47年「コミンフォルム Communist Information Bureau」が設立されますが、「全般的危機」論はじめ「スターリン主義」はかえって強力になります。

独占資本はこの様な状況をいち早く掌握し、47年6月、反共条項を定めた「タフ

社)、同『ヨーロッパとアメリカ』(大屋史郎・西島栄訳、拓殖書房)参照。

11) Stephen Cohen, *Bukharin and the Bolshevik Revolution*, 1973. (コーエン『ブハーリンとボルシェヴィキ革命』塩川伸明訳、未来社)参照。

12) 村田陽一編訳『コミンテルン資料集』第4巻、大月書店所収。

ト・ハートレー法」を強硬に実現します。CIOの指導者たちも共産党員や共産党が支配する組合を労働界から追放しました。47年3月の「トルーマン・ドクトリン」と冷戦化の動きの中で、「マッカーシズム」のような共産主義のみならず、それに中立的な「ニューディール・リベラリズム」をも攻撃する極端な野心的・保守的政治家の運動もありましたが、大部分の知識人は、既存の「国民的価値」に対する順応を、そして批判よりも現実の肯定を主張しました¹³⁾。

(2) T・パーソンズ

H (a) 以上のようなアメリカ的リベラリズムを代表する社会思想家として、先にふれたハーヴァード大学のタルコット・パーソンズ(1902-79)がいます。彼はパクス・アメリカーナの発展の中で、「自由-民主主義」という「アメリカ的国民国家のイデオロギー」にもとづく「秩序の問題」,「社会システム」を、まことにオプティミスティックに体系化した「機能主義」的な現代産業社会論を説きました。

パーソンズはコロラド州で会衆派教会の牧師で英文学者であった父のもとで生まれました。つまり禁欲的プロテスタンティズムの家庭環境の中で育つ。マサチューセッツのアムハースト大学卒業後、一年間ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)に留学しますが、翌年1925年、米独交換研究員としてハイデルベルグ大学に派遣されます。マックス・ウェーバー(1864-1920)の本拠地である、ここで、はじめてウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1904年)を読み衝撃をうけます。それに1920年ウェーバー亡きあとの、妻マリアンネ主催の「ウェーバー・サークル」に出席してカール・マンハイム(1893-1947)らと親交を結んでいます。1927年、ハイデルベルク大学に学位論文「マックス・ウェーバーとヴェルナー・ゾンバルトの理論における資本主義の概念」を書いて博士号を取っています。その頃

13) Harvey Klehr, John Eari Haynes, and Fridrikh Igoreevich Firsov, *The Secret World of American Communism*, 1995. (クレア, ヘインズ, フィルソフ『アメリカ共産党とコミンテルン』渡辺雅男・岡本和彦訳, 五月書房), Sidney Lens, *Radicalism in America*, 1966. (レンズ『アメリカのラディカリズム』陸井三郎, 内山裕以智訳, 青木書店), Irving Howe and Lewis Coser, *The American Communist Party*, 1957. (ハウ, コーザー『アメリカ共産主義運動史』西田勲, 井上乾一訳, 図書刊行会), William Foster, *History of the Communist Party of the United States*, 1952. (フォスター『アメリカ合衆国共産党史』合衆国共産党史刊行委員会訳, 大月書店)等参照。

からパーソンズはウェーバーのペシミズム、「官僚制的化石化」の主張には疑問を持っていたようです。

二年間の留学の後、母校アムハースト大学の経済学の講師、翌年ハーヴァード大学の経済学部講師になり、以来一貫して同大学に在職します。ハーヴァードでのヨーゼフ・シュンペーター（1883-1960）との交流やイタリアのヴィルフリート・パレート（1848-1923）の影響によって、アルフレッド・マーシャル（1842-1924）の理論を、経済学の領域を包括した社会学の体系として位置づけ、さらにエミール・デュルケム（1858-1917）の社会学を吸収して、37年に「主意主義的行為論」に立つ処女作『社会的行為の構造』¹⁴⁾を出した。1931年から新設の社会学部に移っていますが、以上がパーソンズ社会学理論の初期といえます。

F その主意主義的行為論というのは。

H はい。パーソンズは、この段階では行為者は目標や手段の選択決定にさいして、実証主義的要素である「状況的条件」とデュルケムが言う超個人的な「集合表象」としての観念・シンボル体系によって影響を受けるけれども、しかし最終的には行為者は主体的に意思決定する自律的な人格の個人であると考えているということです。

(b) しかし、パーソンズは中期以降にはいると相互行為システムとしての「社会システム」へと移行していき、そこから人格的個人として意思決定する行為主体に代って、規範によって規定された「地位-役割」の担い手としての行為者が登場するのです。そこでは、人々の関係は、価値・規範に規定された「地位-役割」の担い手間の関係になる。

そしてパーソンズによれば、まず価値の所与性としての「文化的システム」が、個別的な「社会システム」の地位-役割関係を規定する規範を制御するのです。それにこの所与性としての文化的価値は「パーソナリティ・システム」に学習過程をへて「内面化」と言うのです。すなわち一般的な価値が個々の「パーソナリティ・システム」のうちに内面化され、それを通して「社会システム」の規範構造が規定され、相互行為がパターン化されて社会システムは制度化されるということです。

「文化（culture）とは、……行為指向の諸客体のうちで、個人行為者たちのパーソナリティの内面化された構成要素となり、社会システムの制度化されたパターンをな

14) Talcott Parsons, *The Structure of Social Action*, 1937. (パーソンズ『社会的行為の構造』稲上毅・厚東洋輔訳、木鐸社)。

している，いくつかのシンボルのパターン化され，また秩序づけられたシステムにはかならない」¹⁵⁾。

彼はこのような制御ヒエラルヒーを保証するためのメカニズムとして「社会化」と「社会統制」を強調しています。なぜかという，このような社会システムが世代を越えて，現行の役割構造に即して行為するよう社会化されていくことが必要だからであり，また逸脱を生じた時には，それを修正して同調をとりもどすよう社会統制を加えることが必要だからです。

この段階，いわゆるパクス・アメリカナの発展のもとで，彼の理論は飛躍的な影響力を持つようになり，パーソンズはエドワード・シルズ（1911－）との編著『行為の総合理論をめざして』¹⁶⁾（1951年），『社会システム論』（1951年）を出し，また56年には例のAGIL四機能図式として定式化したニール・スメルサー（1930－）との共著『経済と社会』¹⁷⁾を出します。

それから普通，後期のパーソンズと言われる1966年の『諸社会－進化的および比較的視点－』¹⁸⁾や77年の『社会体系と行為理論の進化』¹⁹⁾などは彼の理論の「歴史性の欠如」「変動論の欠落」という批判に対して補おうとしたものです。しかし内容は人間社会の適応能力の進化という「新進化主義」以上には出ていません。1979年5月，ミュンヘン大学で記念講演した後客死します。

F パーソンズが初期の主意主義的行為理論から中期以後の「機能主義」，「システム論」へ移行していったのは。

H (c) はい。第二次大戦に直面して，戦争とアメリカ防衛，参戦に国論を統一し，早急にアノミー状況を克服して「自由－民主主義」に対する「国民的使命感」を育成

15) T. Parsons, *The Social System*, 1951. (パーソンズ『社会体系論』佐藤勉訳，青木書店，326ページ)。

16) Talcott Parsons and Edward Shils (eds), *Toward a General Theory of Action*, 1951. (パーソンズ，シルズ『行為の総合理論をめざして』永井道雄・作田啓一・橋本真訳，日本評論社)。

17) Talcott Parsons and Neil Smelser, *Economy and Society*, 1956. (パーソンズ，スメルサー『経済と社会』富永健一訳，岩波書店)。

18) T. Parsons, *Societies: Evolutionary and Comparative Perspectives*, 1966. (パーソンズ『社会類型－進化と比較』矢沢修次郎訳，至誠堂)。

19) T. Parsons, *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, 1977. (パーソンズ『社会体系と行為理論の展開』多野崎昭夫監訳，誠信書房)。

しなければならないというパーソンズの課題意識によるものであることは明かです。

F 戦後の、あの冷戦とマッカーシズムに対してはパーソンズはどんな態度を取ったのですか。

H リベラリストとして、彼は晩年自分の政治的スタンスを「中央より左」だと自認しています。大統領選挙では民主党を支持するが、それよりも左に立つ「独立派」だと言います。一貫して反ファシズムの姿勢を貫いています。コミュニズムとファシズムを共に全体主義だとして一括して把えるのに反対しています。またマルクス、レーニンと「マルクス主義の知的水準を著しく低下している」²⁰⁾スターリンとを区別しています。彼自身コミュニストの^{シン}同伴者^バだとして、マッカーシーの「忠誠委員会」の「尋問調書」を取られてます。

そしてパーソンズは彼の生涯の課題「秩序の問題」の「究極的価値」として「エキュメニズム ecumenism」（世界教会運動）—ユダヤ教、キリスト教とマルクス主義は究極的な合意に達するという「平和共存」（冷戦の解決）を楽天的に説いているのです。

（３）D・ベル

F (a) さきに戦後のリベラリズムとしてあげられた、ジャーナリズムでも活躍しているダニエル・ベル（1919—）の場合は。

H はい。彼の政治的スタンスは、彼が後（後述）、「新保守主義」の理論的指導者となることからみてもパーソンズにくらべて右です。「マッカーシズム」に呼応して1951年シドニー・フックを中心に結成された知識人のグループ「アメリカ文化自由会議 American Committee for Cultural Freedom」にベルは52年から参加していますが、そこでは「社会主義」「共産主義」に対して柔軟な立場を取るリベラリズムに対しても批判的な、言わば「冷戦リベラリズム」です。

前にもふれたフックですがニューヨーク生まれのユダヤ人です。ユダヤ人の中で最も早くアカデミズムの世界に入るチャンスをつかんだ人ですが、1934年ニューヨーク市立大学の教授になりマルクス主義者としてすぐれた業績をあげた。またその頃、共

20) パーソンズ『社会体系論』上掲、379ページ参照。なおこれらの問題については高城和義『現代アメリカ社会とパーソンズ』（1988年、日本評論社）、同『パーソンズとアメリカ知識社会』（1992年、岩波書店）等参照。

産党の「社会ファシズム論」に反対してトロツキーの支持者になった。だがフックは40年末になると反スターリン主義から徹底的な反共産主義に変わっていった。52年にはマッカーシーの体制擁護も辞さない反共産主義になっていったのです。

ベルも反スターリン主義ですが、フックのように体制を擁護することもしないという立場でした。もともとベルもニューヨーク生まれのユダヤ人です。

F (b) 一寸ベルに入る前に、いわゆる「ニューヨーク・ユダヤ系知識人」について話していませんか。

H ベルは論文「アメリカ社会における『インテリゲンチヤ』」²¹⁾ (1976年)の中でアメリカの文化に影響を与えたニューヨーク・ユダヤ系知識人を次の二つの世代に分けて論じています。第一世代は20年代後期から30年代初期にかけて登場したエリオット・コーエン (1899-1959)、ライオネル・トリリング (1905-75) やシドニー・フックら。彼らの弟世代^{ヤング・ブラザー}として、リチャード・ホフスタッター (1916-70) らがいる。次の第二世代 (30年代後期から40年代初期にかけて登場) は、ダニエル・ベル、アーヴィング・ハウ (1920-93)、セイモア・リップセット (1922-)、アーヴィング・クリストル (1920-)、ネイサン・グレイザー (1923-) らである。その弟世代は、ノーマン・ポトレツ (1930-) などです。

彼らの多くが育ったのはニューヨーク各地のユダヤ移民集住地区^{ゲットー}でした。それは19世紀後半から20世紀初頭にかけてロシアおよび東欧から移住してきたばかりの、いわば「新移民」(彼らはそれまでの西欧・北欧からの移民と区別してそう呼ばれた。フロンティアはすでに消滅していた) たちが住む場所でした。アメリカ社会と異質の生活習慣を引きずっていた新移民の世代では到底同化できず、彼らは行商人か縫製工場で苛酷な生活を強いられた。移住以前から社会主義の洗礼を受けていたユダヤ移民の中から労働運動が高まった。移民2世 (ニューヨーク・ユダヤ系知識人) はこうした環境の中で「アメリカン・ドリーム」を夢みて勉学し、多くはニューヨーク市立大学 (授業料が安かった) や学生グループで社会主義的な知識を身につけた²²⁾。

F 彼らの場合、社会主義と言っても、ソヴェト共産党の立場というより、トロツ

21) Daniel Bell, *The Winding Passage*, 1980. (正慶孝訳『二十世紀文化の散歩道』ダイヤモンド社の第6章参照)。

22) ニューヨークのユダヤ移民については野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク』(1995年, 山川出版社)。「ニューヨーク知識人」については堀邦雄『ニューヨーク知識人』

キーズムの方が強かったのではないですか。

H そうです。例えばそれは、34年創刊された共産党の機関誌『パーティザン・レビュー Partisan Review』に対して、ニューヨーク知識人が「モスクワ裁判」に反対したため、36年休刊になったことに現われています。37年12月、新しく反スターリン主義の立場に立って、再刊されますがその主要なメンバーの中にトリリングやフックがいます。

1930年代の終り頃からニューヨークのユダヤ人の社会的上昇は顕著になります。35年、ユダヤ人はニューヨーク市立大学の学生の49%を占めています。37年、ニューヨーク市でユダヤ人は市人口の25%を占めています、市の弁護士および判事の65%、歯科医の64%、医師の55%がユダヤ人でした。

第二次大戦の終結とともに、冷戦を背景として、本格的なフォーディズムが発展しました。高度産業社会の進展とともに「新中間層」の増大、「福祉国家」の確立、大衆社会化が拡大し、教育、大学教育も大衆化がすすみました。大学で新任教員の需要が高まるなかで、今までアウトサイダーでしかなかったユダヤ系・ニューヨーク知識人の学術、文化への、社会の中核への進出が急激に高まりました。もっとも、そこには、すでに30年代、フランクリン・ローズヴェルトが、その側近学者としてドイツ系ユダヤ移民の子孫の多くの知識人たちを起用していたということがあった。また大戦前後にナチスのユダヤ人迫害を逃れてヨーロッパから亡命してきた多くの著名な「亡命知識人」たちが、困難ながらアメリカの大学で職を得たことが、これらニューヨーク知識人たちがアカデミズムへ進出するのを助けたという事情もあった。

ニューヨーク知識人の多くはアカデミズムやアメリカ文化の中軸へと進出しますが、その過程でそれまでのラディカルな変革志向が次第に後退し、「福祉国家」と「アメリカ社会」への帰属意識を拡大し、保守化します。アメリカ的「リベラリズム」の代表的な思想家になる。冷戦体制のなかで反共産主義的になるとともに、アメリカ資本主義の現実に対して妥協的になっていきます。「アメリカ・ユダヤ人委員会」(AJC)の支援のもとに、コーエン、フック、クリストルやグレイザーらによって「アメリカ文化自由会議」の主張を代表する雑誌『コメンタリー Commentary』(1945創刊)を出しています。この雑誌は後、ポトレツが編集長になってから反動的な、反共・反リ

(2000年、彩流社)、秋元秀紀『ニューヨーク知識人の源流』(2001年、彩流社)等参照。

ベラルな主張が強くなり、レーガン政権下の「新保守主義」を代表するものになります。

ただ私がよく参照文献として取り上げているアーヴィング・ハウ、それに1913年ベルリンで生まれ41年アメリカに亡命移住したユダヤ人ルイス・コーザー（1913-）らは『コメンタリー』の反共産主義、体制擁護への動きに、あくまで反対して、反スターリン主義であるが、アメリカの資本主義体制に対しても批判的である「民主的社会主义」の立場をとります。『コメンタリー』に対抗して1954年に雑誌『ディセント Dissent』を出す。『ディセント』はその後、60年代末の世界的なニューレフトの運動とも結びつき、またイギリスの『ニュー・レフト・レビュー New Left Review』とも連帯していきました。

F (c) では、もとにもどってベルについて話して下さい。

H はい。ダニエル・ベルは1919年、ニューヨークのスラム街で生まれ、イースト・リバー・ドック付近で育った。父はポーランド系ユダヤ人の移民でしたが、彼の生後6カ月にして死んでしまったため、熱心な社会主義者であった母親に育てられました²³⁾。母親は縫製工場で働いて生活を支えた。早熟な少年はわずか13才で、すでにマルクスやミルの著作に接し、1932年の晩夏、社会党の青年組織である『青年社会主義者連盟 Young People's Socialist League』に加入しています。

この時期ベルは母のいとこのロシア系ユダヤ人でアナーキストの夫婦の影響を受け、反コミニズムの強い感情を持つようになります。

36年、彼はニューヨーク市立大学に入学し、また学生運動のリーダーとして活動する。翌年、社会党が共産党と共同戦線を組むか否かの問題をめぐって分裂した時、彼は統一戦線を志向していた左派に反対して、反コミニズム的な右派に参加しています。この姿勢はモスクワ裁判、スペイン市民戦争や独ソ不可侵条約によって、いよいよ拡大します。38年、コロンビア大学の大学院に入学するとともに40年から（44年まで）社会民主主義系の雑誌『ニュー・リーダー The New Leader』のスタッフになっています。45年からシカゴ大学の講師に就任する。

1948年の秋、シカゴ大学を去ってニューヨークに戻り、雑誌『フォーチュン

23) ベルの来歴についてはベル「わが発想の原点」（玉川雄幸訳、『Will』1982年7月号所収）、矢沢修次郎論『アメリカ知識人の思想』（1996年、東京大学出版会）、高橋徹『現代アメリカ知識人論』（1987年、新泉社）等参照。

Fortune』の編集者になる（59年まで）とともに「アメリカ文化自由会議」に参加し、59年コロンビア大学の社会学教授に就任します。そして60年、50年代に関する論文集『イデオロギーの終焉—1950年代における政治思想の涸渇について—』を出します。また50年代から60年代にかけて追究してきた「脱工業社会」という概念を、73年の『脱工業社会の到来』の出版によって総括します。彼はコロンビア大学で、あの68年の「学生の反乱」に直面しますが69年、ハーヴァード大学に移っていますし、65年には「新保守主義」の雑誌『パブリック・インテレスト Public Interest』を古くからの「ニューヨーク知識人」の友人クリストルと一緒に出しています。

F 「イデオロギーの終焉」というと、やはり「ニューヨーク知識人」で政治社会学者であるセイムア・リップセットも主張していますね。

H はい。リップセットもベルの少し年下の古い友人です。やはり1922年ユダヤ系移民の熟練労働者を父にニューヨークで生まれた。ベルと同じニューヨーク市立大学、コロンビア大学大学院に進学して以来二人はよき友人です。ニューヨーク市立大学在学中に「青年社会主義者連盟」にも入り、教職についてからもずっと顧問です。

1948年カリフォルニア大学バークレイ校に就任、50年から6年間、コロンビア大学に移るが、56年カルフォルニア大学に戻り、59年、有名な『政治のなかの人間』²⁴⁾を出し、ここで「イデオロギーの終焉」論を書いています。またここから彼は例の65年前後の「バークレイの学生反乱」に直面し、66年追われるようにしてハーヴァード大学に移っています。75年以後はスタンフォード大学に移っています。

F (d) それではベルが『イデオロギーの終焉』、『脱工業社会の到来』についてで主張しているのは。

H はい。彼が「イデオロギーの終焉」を説く時、その背後にあるのは、一方モスクワ裁判、独ソ不可侵条約、強制収容所、ハンガリー事件のつながりであり、他方アメリカ資本主義の高度成長、フォーディズムの成熟、新中間層の増大、福祉国家の成長である。

そこでは資本と労働、資本主義か社会主義かという、かつて人々に情熱と実践をもたらし^{パッション}た「全体的イデオロギー」、「体制的課題」は最早存在しなくなり、存在するのは、ただ「産業化」、「産業社会」だとしてイデオロギーの終焉を説くのです。「わた

24) Seymour Lipset, *Political Man: The Social Bases of Politics*, 1959. (リップセット『政治のなかの人間』内山秀夫訳、東京創元社)。

しにとって、『イデオロギーの終焉』とは政治における狂信主義と絶対的信念の終りであり、一枚の青写真にしたがって、いとも容易に社会の改革ができるという『傲慢さ』の放棄なのである。イデオロギーの終焉は市民社会の始まりである²⁵⁾。

ここでベルが「全体的イデオロギー」と言っているのは、カール・マンハイム（1893－1947）の主張²⁶⁾にしたがって、「ある価値を信じると言う諸個人は同時に利害と結びついている」＝「特殊的イデオロギー」に対して「広範な現実に関する全包括的体系であり、情熱をふきこんだ一連の信念であり、全生活様式を変改しようとする」とめる＝「全体的イデオロギー」²⁷⁾のことです。そして、それはベルによれば左翼イデオロギーであり、とりわけマルクス主義の終焉である。またイデオロギー政治＝知識人の政治の終焉、さらには社会運動の終焉である。現在重要なのは、「イデオロギー」ではなく「科学」であり、「信仰の梯子」ではなく「経験の梯子」である²⁸⁾。これは言うまでもなく、「パクス・アメリカナ」^{ミドルブライウ・ソサエティ}、「アメリカ・リベラリズム」の、まことにオプティミスティックな現実肯定論であり、「産業社会論」のイデオロギーです。

さきに紹介したリブセットも「民主主義的な階級闘争は継続するだろうが、それはイデオロギーもともなわないし、赤旗もないし、メーデーの行進もともなわない闘争となるだろう。このことは当然のことながら、イデオロギー信奉者として、また現状に関するおもな批判者としてのみ参加することのできる多数の知識人の地位をくつがえすことになる」²⁹⁾とっています。

なおベルらのこの様な主張は、ベルが、そこでオルテガ・イ・ガゼット（1883－1955）やエミール・レーデラー（1900－80）らが説く「大衆社会論」を批判して「社会解体と衰退という暗黙の診断を含んでいる」ペシミスティックな「大衆社会」の概念は、「都市化・産業化・民主化が社会史上先例のない規模で」すすんでいるアメリカ社会では意味がない。アメリカでは「巨大な中流社会」^{ミドルブライウ・ソサエティ}がもたらされた³⁰⁾と言って

25) D. Bell, *The End of Ideology: On the Exhaustion of Political Ideas in the Fifties*, 1960. (ベル『イデオロギーの終焉』岡田直之訳、東京創元社、12ページ)。

26) Karl Mannheim, *Ideologie und Utopie*, 1929. (マンハイム『イデオロギーとユートピア』鈴木二郎訳、未来社)。

27) ベル『イデオロギーの終焉』上掲、258－9ページ。

28) 同上、266ページ。

29) リブセット『政治のなかの人間』上掲、346ページ。

いるのに対応しています。

F (e) 『脱工業社会の到来』(1973年)はベルが50年代末(1959年のオーストリアのザルツブルグ・セミナー以来)から60年代にかけて、「産業社会論」,「イデオロギーの終焉論」を追求する中で未来的に連続させたものです。

H はい。ベルにとって「脱工業社会」という概念は「西洋社会の社会的枠組の変化に関する社会的な予測」です。彼はその分析にあたって社会を三つの領域に分ける。①経済的・技術的・職業的制度を含む「社会構造」,②社会における権力への競争を調整する「政治」,それに③経験と超越的思想との象徴的意味あいの領域である「文化」です。

この各次元はそれぞれ独自の原理で動くものであり、彼によれば「脱工業社会」はなによりも「社会構造」の次元の変化である。すなわちその変化の第一は経済部門の「財貨生産経済からサービス経済への変遷」であり、職業分布では「専門職・技術職階層の優位」,そして「脱工業社会」の理解にとって鍵になる「中軸原則」は生産の計画や政策の決定において経験的知識に変わって理論的知識が重要になることだと言います。「経験主義に対する理論の優位……さまざまな経験領域の説明に使用できるような抽象的なシンボル体系への知識の集成である」。「《理論的》知識の中心性である」³¹⁾。

この様な「脱工業社会」がすすめば、知的機関、知的集団の役割も増大するとともに、企業の役割も変化し、従来の私的効率を中心とした「^{エコノマイジング}経済化様式」から社会的要請を考慮した「^{ソシオロジャイズン}社会学化様式」の方向へ移行せざるを得ない。自由な市場による経済秩序ではなく、行政や政府による調整という新しい経済秩序の体制が生まれてくる。つまり、この過程で全体としての経済的意思決定はより政治的なものになるとベルは言っています³²⁾。要するにこのようなベルの主張は、やはり「パクス・アメリカナ」,「アメリカ的リベラリズム」の機能主義的な現実肯定論です。60年代の民衆の社会変革へのエネルギーを、「社会システム」における「機能不全」,「逸脱」として、テクノクラートが、ふたたび価値体系に統合すると言うのです。

30) ベル『イデオロギーの終焉』上掲, 17-8 ページ。

31) D. Bell, *The Coming of Post-Industrial Society*, 1973. (ベル『脱工業社会の到来』内田忠夫ほか訳, ダイヤモンド社, 上, 22-30ページ)

32) 同上, 上, 61ページ。下, 381-92ページ。

もっともベルは大衆の反乱に直面して70年代、その混乱の原因を「文化の領域」、機能的合理主義的な「社会構造」と反合理主義的な「文化」の矛盾にあるとし、後に述べる様に「聖なるものへの回帰」や「公共家族 Public Household」の再建を提唱³³⁾して「新保守主義」の潮流に流れていきます。

33) D. Bell, *The Cultural Contradictions of Capitalism*, 1976. (ベル『資本主義の文化的矛盾』林雄二郎訳, 講談社学術文庫)。